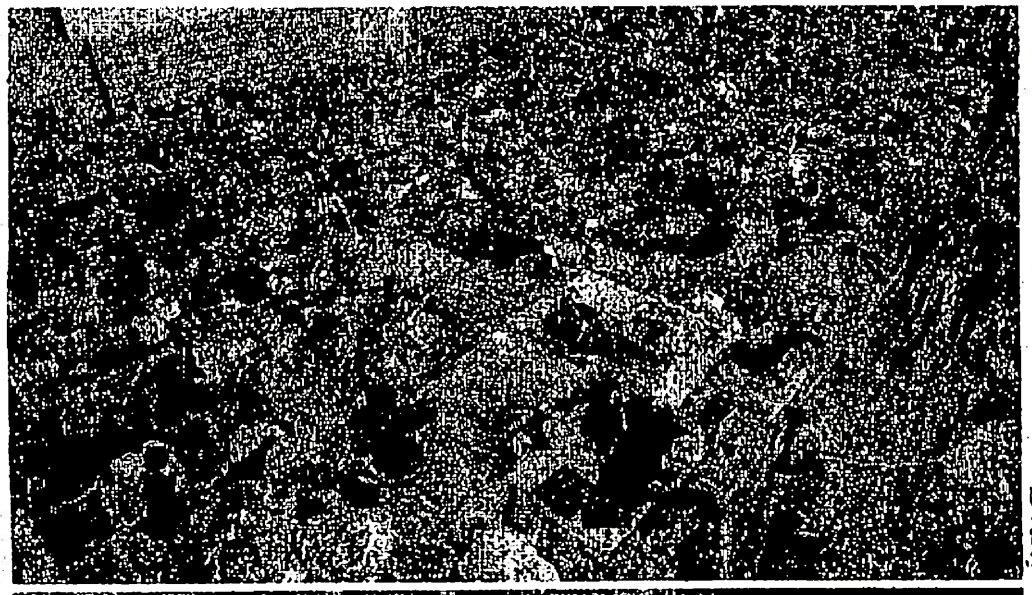
電気、ガス、水道よりも必要なのはトイレだった

最大の避難所 小千谷市総合体育館を襲った悲劇

10・23 あの傷跡は今

新潟県中越地震から1年



▲▲ 04年10月24日、あらゆる床に毛布を敷いて休む小千谷市総合体育館に避難してきた人たち【下】05年10月19日、一時は3000人を超す避難民が集まった体育館では子供たちがバスケットボールをしていた（ともにカメラ・樋口 亘）

被災の中心・小千谷市最大の避難所となった同市総合体育館。当時、思ったのは「電気、ガス、水道などライフラインのうち、人が生き残るためにどれが一番大事か」。答えは1年後、再訪した体育館にあった。

19日、同体育館では小学生たちがバスケットボールを楽しんでいた。真剣なまなざしでシュートを打つ子供たち。その足が踏みしめる床には1年前、"地獄"が広がっていた。

市内最大の屋内施設だった総合体育館には震災3日目の26日、約3000人が、2週間、ありとあらゆる床に毛布を敷いていた。当初は「食料が欲しい。今日の昼飯もスナック菓子だよ」と漏らしていた人々の言葉が日がたつにつれて、変わっていく。「トイレに行きたくないから、もう何も食べたくない」そういう男性の顔はあかぬけてギトギトし、連日、車中泊だった記者も尻がかゆくなっていた。

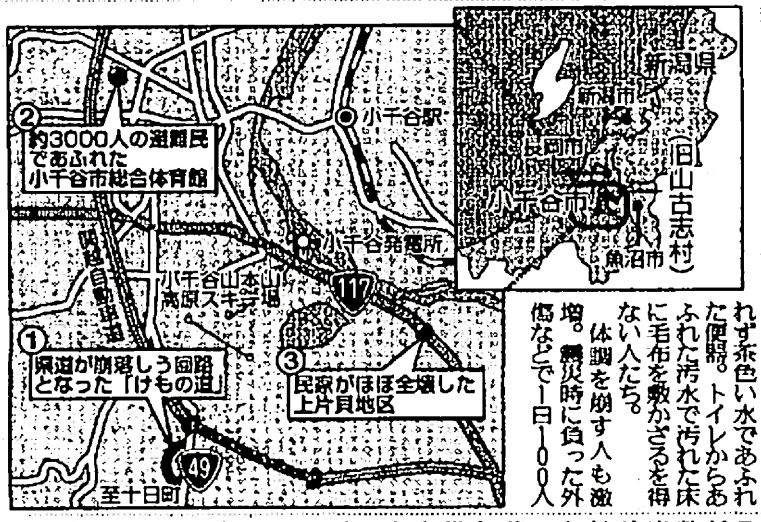
全国からの救援物資に加え、震災数日でファストフード店が営業再開するなど、避難者たちへの食料は十分。体育館を襲ったのは人間に不可欠の"排せつ"からくる不衛生さ。水が流れず赤色い水であふれた便器。トイレからあふれた汚水で汚れた床に毛布を敷かざるを得ない人たち。

体調を崩す人も激増。震災時に負った外傷などで一日100人が訪れていた館内の診療所には3日目になると、風邪や腹痛などを訴える300人以上が行列。今回、再会した水道局関係者も当時の"トイレ事情"について「もう思い出しなくない光景」と話した。

あまりの不衛生さに加え、「他の人と一緒では落ち着かない」と避難所を離れ、体育館横に止めたマイカー内で車中泊を続けていた人も、17人のうち6人がエコノミークラス症候群を発症。3人が死亡した。今年8月、数千人の犠牲者を生んだ米ニューオーリンズでのハリケーン「カトリーナ」被害の際も、排水の不備から伝染病が広がった。

「自治体が緊急用に備蓄しているトイレが足りない。今のうちに『災害備蓄条例』を作り、企業、自治体などで分担するべき」と指摘するのは防災アドバイザーの山村武彦氏だ。

震災当時、体育館で、ライフラインへの不満の声は上がらなかった。"地獄"を呼んだのはトイレの数。今後、大地震発生が危惧（きぐ）される東京都には約1200万人がひしめく。スポーツに夢中の子供たちを見ながら、記者を襲ったのは「"体育館の悲劇"が繰り返されるかも」という恐怖だった。



便器からあふれる汚水、汚れた床に敷かれた毛布…本調崩す人が数増

奇跡の

新潟県中ゆ見町の土まれ、92時救出された（3つ）＝

▶飛騨の写真を手島忠美氏

旧山古

23日に被る新潟県中り、大きな古志村（長村長で自民院議員が小策特別委員に立ち、災状況を聞

先端的文化に触された使さ30以